命のゲーム

霧崎俊哉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
命のゲーム

【Ｎコード】
Ｎ８９３５Ｗ

【作者名】
霧崎俊哉

【あらすじ】
日本ではあるゲームが流行っていた。
北海道のある田舎町
そこにはこのゲームの餌食になった学校があった。餌食になった学校はまた新たな生徒を受け入れ普通に勉強を再開する。
今までの事がまるでなかったように。
このゲームの餌食になった学校の生き残りの俺が　学校で起きた悲惨さを教えよう。

説明（前書き）

宮崎<<<この作品の主人公部活をしている。

福嶋<<<宮崎の友達で運動もまあまあ
頭も良い。

竹中<<<宮崎の友達で頭が良い。運動もまあまあ。
中山<<<宮崎の友達で部活をしている。

この人達で話を進めます。

説明

西暦２０ＸＸ年日本ではあるゲームが流行っていた。
それは
どこでも良いのだがひとつの学校に生物兵器を投げ入れ生徒達を逃がして最後に残った人に賞金を与えると言うものだった。このゲームはただ遊びで逃げるのでは無い。
このゲームには掛かってるのだ。

命が

これを聞いた者は人権があるから無理だろうと思うだろうが
これは天皇が決めたことなのだ。
そして今の日本の主権は天皇にある、つまり独裁政治になってしまったのだ。
昔の日本は５年間で６人の首相が代わるとゆう異例の事態が発生した。
この実態を見た日本政府や国民は天皇に主権を戻したら景気が良くなるんじゃないかとゆう結果にたどり着いた。
案の定その通りになった。
たが天皇にはひとつ問題があった
それは

遊びが大好き

とゆう事だ。
最初に言ったゲームは天皇がある問題の政策に提案したのだ。
その問題とは

人口が多いとゆうことだ。今の日本は人口が一位の中国を抜いて第一位だ中国の人口が十三億人だったら日本の人口約二十億人になっていた。
これは日本の中では大問題だった。なので天皇は先のゲームを提案したのだ。それに天皇は遊びが大好きで良い暇潰しになった。

これはただ一人田舎の学校で生き残った俺が話そう。

DAY1　ゲーム開始

ゲームが知らされる最初の朝。家を出るときの母の異常な態度を横目でみつつ友人との待ち合わせの場所へ向かった。

「うぃーす」

俺は既に来ていた友人に挨拶をして学校へ向かった。

ーーーーー

学校へ着き友人と別れ同じクラスの趣味仲間と話をしていた。

「なぁ。中山」

「どうした？」

俺は朝からの疑問点を聞いた。

「今日の朝さぁ母親の態度が変だったんだけどお前んちはどうだった？」

「朝かぁ。そうだな俺の親も変な感じだったな」

「あっ。俺んちも」

「俺も」

なんと趣味仲間の全員の家で親が異常な態度をしていたのだ。俺が考えていた時にチャイムが鳴った。俺たちは自分の席に座り担任をまった。

少し待っていると先生が教室にやって来た。

「皆席につけ！」

先生の一言で皆席に着いた。俺はなぜか底知れない不安感に襲われていた。理由はわからない本当にわからないのだ。すると先生が

「みんなにお知らせがある」

次に発した先生の言葉を聞いた俺は底知れない不安感の理由を知った。

「今日の朝、校長から話があった。この学校がゲームの会場になっ

た」
俺はやはりかという感じだった。周りを見ると皆は至って冷静だった。
中には体を震わせ手を合わせている奴もいた。
「そして今回は新しいルールが適用される事になった」何をいってるんだ？新ルール？ふざけてる人の命をもてあそぶなんて！
俺は怒りに満ち溢れていた。
「新しいルールというのはだな一週間の間に生き残った者全員に賞金が与えられるというものだ！そしてゲームが始まって三日間は生物兵器が一体。四日目から６日目までは二体。最終日は三体になった」
皆これを聞いた瞬間に盛り上がった多分生き残る確率が上がったからだろう。
「先生何時からゲーム開始ですか？」
一人の生徒が質問をした。
「ＨＲが終わった後の九時にスタートだ昼と晩飯の時は一時間休憩。そのご１０時までゲームを開始して就寝に入る。就寝時間にはゲームは終了する。そのときは鐘がなるから聞くように、それではＨＲ終わり！
皆！散らばれい！」
先生がそう言った瞬間にクラスの大半が教室を散らばった。学校は西校舎と東校舎に別れていて行き来するには渡り廊下を通って行かなければならない。
俺らのクラスは東校舎にあった。
俺は未だに教室にいた。「俺らも移動しようぜ！」
趣味仲間の中山が誘ってきた。
「俺はまだいい」
俺は断った。
「なんでだよ？ささっといかないと死ぬぞ？」
「俺はまず分析をしたい生物兵器がどんなものなのか？俺がいる校

舎に今どれくらいの人がいるのか？そしてその生物兵器の侵入経路等だ」
俺は言った。教室には俺ら二人以外はいなかったのでこういう話が出来た。すると放送がかかった。「ゲーム開始まで残り五分です皆さん緊張感をもって取り組んで下さい」
放送が終わり俺は席をたった。
「俺は福嶋を探す手伝ってくれ中山！」
「わかった！」
俺と中山は福嶋を探すため教室を出た。

そして探しはじめてから五分後史上最悪のゲームが開始され西校舎からはうめき声が聞こえていた。

ＤＡＹ１　ゲーム開始（後書き）

すぐに終わりそうですが勘弁してください？？

ＤＡＹ１　捜索そしてリーダー決定（前書き）

＞奴＜という言葉は生物兵器です。

ＤＡＹ１　捜索そしてリーダー決定

俺達はまだ福嶋が東校舎にいると信じて探した。だが探している最中に俺らは絶句したなんと渡り廊下にバリケードが作られつつあった。俺は近寄り紙みたいなものが張られていたので見てみた。そこにはこう書かれてあった。

＞完成まで２４時間＜

と。

俺らは紙を見た後に上の階に行き福嶋を探したが居なくその上の階にもいなかった。

「ここまで探して居ないとなると西校舎が怪しいな」俺は中山にある提案をした。

「明日の九時までに福嶋を見つけてくる二階のバリケードでおちあおう」

中山はわかったと言った。そして俺は単身で西校舎に入っていった。

――――

空き教室の時計を見ると１０時を過ぎていた。

「後２３時間か」

俺は小走りをして西校舎を走っていた。

すると前から１０人程のグループが走ってきた。俺は福嶋の場所を聞こうと思ったが様子が変だなんか焦っているような感じだった。良く見るとそのグループの後ろに手に鎖をして血まみれの人間が追いかけてきていた。

俺はそいつを見たときに既に何人かは犠牲になったんだと悟った。

すると逃げ遅れた一人が血まみれの奴に捕まった。

俺は愕然とした。

「ぐわぁ！やめろ！」

なんと逃げ遅れた一人を血まみれの奴が食いちぎっていたのだ。
「なんと酷い、まぁアイツのおかげで生物兵器は人型だとゆうことがわかった」
食い終わった奴はまたノロノロと歩き始めた。すると奴をめがけてグループの一人が殴りかかった。食われた奴の親友なのだろう声を張上げ向かっていった。
だが奴は別の角度を向いていたのも関わらず人並み外れた動きをみせ殴りかかった人を押し倒し食いちぎった。
「ぐわぁ！」
喉元を食いちぎられた人は即死した。
俺は遠くに居ながらも吐き気が襲ってきた。

俺は奴と反対側の階段から上えと上がり福嶋を探しに行った。
だがそこに合ったのは学校の生徒の酷い死体だった。
「一番上から始まったのか」
俺は死体に目を向けずに走っていると茶道室から話し声が聞こえた。
中を見たら女子がきつきつに入っていた。
なかにはパニックになっている人もいたが今は福嶋を探しているので気にせずに立ち去った。

ーーーーー
次に立ち寄ったのは音楽室だ中には一人の男がいた。
「竹中か？」
俺はピアノの近くにいた男に話しかけた。
「宮崎？宮崎か！」
男は竹中。
朝に一緒に話していた趣味仲間だ。
「無事だったか宮崎！」

「あぁ。だが静かに奴は声に反応しやすいからな」
「奴って！？」
「俺が勝手に呼んでいる生物兵器だ」
俺は福嶋を探しているんだと説明して一緒に探してくれと誘った。
「あぁ。わかった。アイツの場所は知っている美術室だ」
竹中は福嶋の場所を知っていた。
時刻は十二時を過ぎていた。すると放送がかかり　「昼食の時間です。今から届けに行くので動かないで下さい」
放送が終わると自衛隊みたいな人が音楽室に入ってきて昼食を届けてくれた。
そして最後に。
「生き残るんだよ」
と言い残して去っていった。

ーーーーー
俺らは３０分で食事を済まして残りの時間で少し休憩した。
そして時間がたちゲームが再開。
再開した瞬間に叫び声が聞こえた。すぐに捕まったのだろうと確信した。少しした後に俺らは二階にある美術室に向かった。下へ降りたら先ほどの死体は回収されており何事も無かったようになっていた。
静かに廊下を歩き何とか奴に会わずに美術室にたどり着いた。
そして扉を開けるとそこには福嶋が寝ていた。
たった一人で。

「おい！福嶋起きろ」
竹中が起こそうとしたが福嶋は起きない。
俺は見張りを交代し福嶋を起こしに向かった。
たが福嶋は寝ているのではなく気絶していた。
額から血が出ていたので多分一緒にいた奴らと口論になり何かで殴

られたのだろう。
「うっ・・・うううう」
すると苦しそうな声を出しながら福嶋が目を覚ました。
「おい大丈夫か？」
俺は福嶋に問いかけた。　「う、うん何とかな」
「歩けるか？」
大丈夫だと福嶋は言い立ち上がった。
俺が時計を見ると既に3時になっていた。
「残り18時間か」
俺はそう呟くとそれを聞いた竹中が聞いてきた。　「何が残り18時間なんだ？」「追々話すよ
まずここからの脱出が大事だ。幸いにも東校舎ではまだ被害者が出ていないまずそっちに行こう」
俺がそう言うと竹中は納得して俺らは美術室を後にした。

ーーーーー
俺らは二階のバリケード付近にいた何度か奴を見つけ遠回りに道を進んだため渡り廊下まで行くのに2時間がたっていた。　俺らは慎重に渡り廊下を渡り東校舎にたどり着いた。
「一旦教室に行こうか」
「あぁ」
「うん」
三人は自分の教室に向かい歩いていた。
時刻は5時半に差し掛かっていた。
教室に着いてドアを開けると中には中山がいた。　「結構早かったな」
中山は冷静だったがそいつの手は震えていた。
「何かあったのか？」
俺は中山に聞いた。
「あぁ。生物兵器が東校舎に来たんだ！」

「なんだって！？」
俺は少し大きな声でいってしまった。
「静かにしろ」
と竹中が口を塞いでくれた。
「だけど生物兵器はまた西校舎に行ったよ」
「そうか良かった」
俺は安堵のため息を漏らした。そして
「よしそれじゃあ作戦を練ろう」
俺は三人に提案した。
「作戦？」
竹中、中山、福嶋は声をそろえて疑問を唱えた。　「作戦とは具体的にどのような事をするんだ？」
福嶋が聞いてきた。
「あぁ。だがまずリーダーを決めよう！」
俺はこの死のゲームを生き抜く為にはまずメンバーを統率する人を決めた方が良いと思って提案した。
「そうだな…。リーダーは大事だ」
俺に賛同したのは竹中だった。
「俺は福嶋を推薦する」
竹中は福嶋を推薦した。　「俺も福嶋を推薦する。その為にお前を探していたんだ」
と俺も福嶋を推薦した。　「竹中、宮崎」
だが福嶋は乗り気じゃ無かった。
「俺でも良いのか？俺的には宮崎が良いと思う」
福嶋は何故か俺を推薦してきた。
「なんで俺なんだ？」
俺は福嶋に聞いた。
「なぜって…」
福嶋は言葉に詰まった。　「俺も宮崎が良いと思う」　中山までが俺を推薦してきた。

四人の意見は二つに別れていた。
時間は６時前
飯の時間までもう少しあった。
俺は晩飯までにリーダーを決めたかったのでこう提案した。
「俺的に福嶋の方が気転が効くし他の奴等が仲間になったとしてもお前の言うことは聞くと思う。
だからリーダーは福嶋で副リーダー俺＜＜＜宮崎がやる！
これでどうだ？」
俺は三人に提案した。
「そうだな…うん。それが良い」
と竹中が賛同。
「そうだな。俺もそれで」　続いて山中も賛同してくれた。
そして俺は「よし！」と声をかけて教室を後にした。
その時にちょうど晩飯の放送がかかり生き残っている生徒の人数が発表された。

ＤＡＹ１　捜索そしてリーダー決定（後書き）

全生徒＜＜＜４００人

生き残り生徒＜＜＜３２５人になっています。

DAY1　新しい仲間（前書き）

渡＜＜＜新しい仲間　勉強は中の下　部活をしているので体力はある。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

この物語はフィクションです。
人物の名前は実際に居やすい方々の名前を使用していますが実在の人物ではありませんので
ご了承ください。

DAY1　新しい仲間

俺達は晩飯を食べ終え移動を開始した。この学校での生存者の数は前例にない遅さでの減り具合みたいだ。
「皆まだ余裕だな」
俺はボソッと呟いた。
「「そうだな」」
福嶋と竹中は同時に返事をした。
「あれ？中山わ？」
周りを見回しても中山の姿がなかった。
「あぁ。中山は今はトイレだってゲーム開始前にしとくって」
俺は納得して座っていると前から一人の男が来た。
「お～い」
「あれわ？」
「渡だ！」
「渡かアイツまだ生きてたのか！」
男のシルエットはどんどん近づいてきて目の前に来た。
「よっ！無事だったか？」渡は気さくに話しかけてきた。
「あぁ。まぁな！そっちわ？」と福嶋。
「無事なのは俺だけだ
一緒に逃げていた奴は皆食われた」
渡は説明した。
「ちょっと良いか？」
「なんだ？」
「なぜお前だけが生き残っている？普通ならまだ何名かは生き残っているはずではないのか？」
「普通はな」
渡は訳ありそうに口を開いた。
「俺たちも何人かでグループを作って逃げていたんだがリーダーが

敵に捕まったんだ。
そしたら一人が助けようとして敵に向かっていったのをきっかけに一人また一人と気がつけば俺以外の仲間全員が敵に向かっていったが見事食われた」
渡の顔が蒼白してきた。　すると西の方向からトイレを済ましたのか中山が歩いてきた。
「お～い。そろそろ時間だぞ！って。
おぉ！渡、無事だったか！」
「おぉ！中山！お前も居たのか」
「ところで時間が無いって言ってたな？」
「えっ？あっ。あぁ。後
１０分程度だ」
中山は告げた。
「そうか、そろそろ移動するか」
リーダーの福嶋が言った。
「そうだな」
「「「行くか」」」
福嶋以外の俺らが言った。
「あの」
「んっ？なんだ？」
「俺も行っていいか？」
渡が提案してきた。
「福嶋」
「「どうする？」」
「んー、まぁ良いんじゃないか？今は出来るだけ仲間が多い方が良いし」
福嶋は渡が仲間に加わるのを拒まなかった。

「福嶋！ちょっと」
俺は福嶋を呼び出した。　「なした？」
「副リーダーの俺のこれからの意見を聞いてくれないか？」
「あぁ」

「意見というのは仲間の増加に関してだ」
「あぁ」
「俺はこう思う。
お前が言ったように仲間は多い方が良い。
だけど」
「だけど？」
「あまり増やしすぎるなよ！」
俺は福嶋に忠告した。
「あっ、あぁ
わかった。きおつけるよ」
「福嶋～、宮崎～。早く移動するぞぉ」
後ろから竹中の声が聞こえた。

俺らは三人の所へ向かい中央階段へ向かった。

丁度その後に放送がかかりこの日最後のゲーム開始が告げられ。
ゲーム開始と同時に
西校舎から悲鳴とうめき声が聞こえていた。

ＤＡＹ１　新しい仲間（後書き）

一日が終わり俺達は東校舎の一階の木工室に居た。
自衛隊の人達が寝袋を持ってきてくれた。
俺らは寝袋を受け取り１１時に眠りに着いた。

ＤＡＹ２　増加大１（前書き）

中亘＜＜＜陸上部。足が速い。
天野＜＜＜陸上部。スタミナに自信あり。
本木＜＜＜頭が良いが自分が第一。

ＤＡＹ２　増加大１

俺は目を覚ました。
時計を見ると7時３０分を指していた。すると放送がかかった。
「皆さんおはようございます。よく眠れましたか？皆さんにルールの改正を一つ。
ゲームスタートはどの日も午前9時に行いますのでご確認下さい」
放送が終了し終わると俺は立ち上がりタオルを濡らしに水道へ行き戻って来ると中山と福嶋は起きていた。
「おはよう」
「「おはよう」」
二人は挨拶をして俺と同じように水道へ向かった。
「竹中と渡はまだ寝てるのか」ゲームの始まりが近いにも関わらず竹中と渡はまだ寝ていた。時刻を確認すると8時に近くなっていた。
竹中、渡を置いて三人で話し合っていた。
話し合うと言っても雑談程度だ、俺達は雑談をしながら徐々に緊張していく。
時刻は8時３０分。
ゲーム開始時間まで後３０分になった。
その時にムクッと後ろで誰かが起きた。
「おはよう」
竹中だった。
「遅いぞ竹中！死にたいのか？」
俺は少し強くいってしまった。
竹中は時計を見て一言
「悪かった」
と言った。
「まぁ・そう怒るな。まだ時間はある」
福嶋は俺の肩を叩き言ってきた。この時点で福嶋にはリーダーの風

格が出て来はじめていた。
時間は８時４５分にやっと渡が起きた。
俺らは時間が迫っているせいか渡が起きたのは気づいても挨拶はしなかったが福嶋は渡に。
「後５分で移動するから準備しろ」
渡はすぐに準備を開始した。

時間は８時５０分。
「移動時間だ行くぞ」
「「「「あぁ」」」」
五人は移動を開始した。　なぜか知らないが俺らは隊列を作っていた。
隊列は前から
俺→中山→福嶋→竹中→渡。の順で一列に並んでいた。
西階段から二階廊下へ進み真ん中まで来て、右、中央階段、左へと視点を変え見張りをした。

その後放送がかかり。
「これから二日目のゲームを始めます」
放送が終了すると同時に三階でパリン！！と窓が割れる音が聞こえた。
「奴を見かけたら見つかる前に逆方向に逃げろよ」
福嶋は言った。
「「「わかった」」」
「わかった！」
渡以外の３人は小声で言ったが、渡だけは少し声を大きくしてしまった。　「バカ！声がでか・・・！！！」俺が言おうとした瞬間に
「来たぞ！！」
竹中が声を上げ走ってきた。

それを見た渡、福嶋、竹中は俺の方向に走ってきた。
俺は全員が走り去って行くのを待って逃げたが逃げる際に地が飛ぶのが見えた。

俺らは東階段で福嶋の提案で縦一列に変更し上から二人づつ（真ん中は一人）　渡、中山→俺→福嶋、竹山の順で並んでいた。すると俺の居る階の奥から3人走ってきた。
その後ろには一人の学校の生徒を片手に引きずってこちらに向かってきただが様子がおかしい。奴は走っている3人を追わずにジャンプをして西校舎へ向かってった。
俺は奴が西校舎へ行った事を皆に知らせた。
もちろん生きていた三人の事も。
ーーーーーーーーー
「こいつらが生き残りか？」
奴が行ききったことを確認し二階にあるコンピューター室に入り話をしていた。　「このグループに加わりたいと？」
俺は少し低めの声で聞いた。
「あぁ。頼む入れてくれ」　「本木、中亘、天野。俺に聞くなグループのリーダーは福嶋だ！福嶋に聞け」俺は福嶋に決定権を譲った。
「そうだな。今はこの学校での情報が必要だし仲間はまだ多い方が良い」
「それじゃあ！？」
本木は期待の眼差しを向けていた。
「あぁ。今は拒まない」
「ありがとう！」
福嶋は
本木、中亘、天野を簡単には受け入れた。

時刻は１２時になり昼休みになった。

俺達は一階の体育館に行き昼飯を食べていた。
ーーーーーーーーー
５０分経ち俺達は移動した。
二階に戻り人数が多い分前回より間隔が狭くなっていた。
「いいか前も言ったが奴が居たら逆の方向へ逃げれよ」
福嶋は助言した。
全員が「了解」と言って持ち場へ戻る。
そうしている間にも西校舎でわ。
「うわぁ！」
「話せ！」
「助けて！」
などの叫び声が聞こえている。その中には聞き覚えのある声が聞こえている。
だが俺は何故か不思議な笑みをこぼしていた。
「どうした？宮崎」
中山が声をかけてきた。　「あぁ。なんか性格が出るなぁってさ」
「？？？」
中山は分からないとゆう顔をしていた。
「だってさ。グループの仲間が窮地に立たされたら自分は人を助けれるかってずっと考えていたんだけど。
それが今わかった」
「どっち？」
「多分　俺は　おれ・・」
ドン！！　という音が聞こえた。

前を見ると奴が跳ねながら逃げている生徒を追いかけていた。
それを見ながら俺達は少し後ずさりをした。そして逃げていた生徒は奴に捕まり食われていた。
「うっ！」
皆　突然吐き気に襲われた。奴は食った奴の顔を剥がし始めたのだ。

「！！！！」
それ見た俺以外の仲間は全員嘔吐した。
俺は福嶋を探す際に沢山の死体を目の前にしたからなんとか大丈夫
だが、皆は違う
いきなり顔を剥ぐというグロい絵を見たのだ無理もない。すると
奴は突然ジャンプしてこちらに飛んできた。
「ヤバい逃げるぞ！
二方向別れろ！後で合流だ！」
福嶋はそういい俺とは逆方向へ。
福嶋、本木、天野、竹中は東階段へ。
俺、中山、中亘、は西階段へ。
だが一人逃げ遅れた。

渡だった。
渡は捕まりそうになりながら俺の方向へ走っている。
端にいる者は全員が横を通り過ぎるのを見届ければならない。
これは俺たちが作ったルールで暗黙の了解だ。
だから俺は、渡が必死に走ってくるのを待ち構えていた。
俺は後ろにいる奴等を上の階に行くよう先導し他の人に被害が及ば
ないようにした。

だが、目を話した瞬間に　「ぐわぁ！」
とゆう叫び声が聞こえた。
渡が捕まった。
それも足を完全に折られている。
その後逃げる事が出来ない渡がどうなったかは言うまでもない。
俺は静かに渡へ黙祷し上へあがった。

ＤＡＹ２　増加大１（後書き）

二階での逃亡劇の後、俺らは三階の教室に身を潜めていた。
皆、仲間が死んだことに悲しみを露にしていたが休憩時間には皆は冷静に物事を観察し対処していた。

ーーーーーーーー

そして、二日目最後のゲームがスタートした。

ＤＡＹ２　増加大

時刻は夜の７時３０分。二日目最後のゲームから一時間半たっていた。
俺達はまた壁にぶつかっていた。
「一緒に行動してよ！」
「どうする福嶋？」
「今一緒に行動するかを話すのは得策じゃないまだこっちの校舎に居るのなら今日を生き残って消灯時間に入る前に一階の木工室にこい。そこで話す」福嶋はそう言って二階のコンピューター室を出てきた。
「何を話していた？」
竹中は福嶋に聞いた。
「一緒に行動しないかって言われた」
福嶋は答えた。
「まさかお前承諾したのか！？」
俺は竹中を押し退け福嶋に問いかけた。
「いや今は結論を出す時じゃない。
２グループとも生き残ったら木工室にこいと言った話はそこでつける」
「そうかお前らしい選択だな」
俺はホッとして近くにあった窓を見た。
すると
大分遠くだが黒っぽい煙が上がっていた。
「あそこは寺院の近くか」俺はそう呟いて持ち場に戻った。

ーーーーーーー
時刻は九時半あの黒い煙をみてから二時間が過ぎていた。
俺達は待ち合わせ場所の近くにいた。

二時間の間は偶然か奇跡か奴に会わずに進むことができた。
「良かったな奴に会わなくて」竹中は俺に話しかけてきた。
「あぁ、でも不自然すぎる二時間もの間に一回も奴に会わないのはおかしい」「まぁ、そうだけど会わないに越したことはないよな」
「まぁな」
俺が少し談笑したのもつかの間。
「来たぞ！」
奴が現れた。俺は中央階段の近くにいた。
奴の近くに居たのは本木だった。その前に中亘と天野。
二人は少し遠めの距離だったので7割程度で走っていた。
「どけろ！」
でかい叫び声が聞こえて中亘が振り返るともう目の前に本木と奴が来ていた。天野はまだ7割程度だ。
中亘は本気で走って俺のいる中央階段まで来た。　「上へ上がって皆と合流しろ」
「わかった！」
そういって中亘は上へ上がった。

天野は中亘が本気で走ったのをわかっていなさそうだった。
俺は「あいつ死んだな」と小声で呟いた。
本木と天野の差は後２０メートルほどだ。
だが本木は本気で走っているからその距離などすぐに埋まる。
本木と天野の差が１０メートル程になった所で天野身の危険にきずいたがなぜか体が動かなかった。恐怖により体が強張ってスピードが落ち始めた。すると
「どけろ！」
本木が天野へタックルした。
ドン！とゆう強い衝撃で壁に打ち付けられた天野は動けなくなった。
「うっ　うわぁ！」
奴は倒れた天野に標的を変え腕を掴み近くへ寄せ首を噛み砕いた。

首もとから血が大量に吹き出て周りの壁は血で染まった。
本木はやっと中央階段に着き上へ上がった。
俺は全員上がったのを確認して二階へ向かった。
ーーーーー
数分後皆が合流した。
「俺様子見てくる」
「待て。俺も行く」
竹中と中山が様子を見に行ってる間に俺らは奴について話していた。
「あいつの殺しかって人をたべてんの？」
中亘が質問。
「多分な、まぁ大半は殺すのが目的だろうがな」
と俺が答えた。
「なぁ、天野は死んだのか？」福嶋が聞いてきた。
「その事は今日のゲームが終わったら二人で話そう」「わかった」
俺が言った言葉に福嶋は賛同してくれた。
「お～い。様子を見てきたよ」
竹中と中山が帰ってきた。
「どうだった？」
福嶋が聞いた。
「残酷だった。
奴はまだ下に居て天野の叫び声を聞いて様子を見たかったんだろう。
一つの教室が真っ赤に染まっていた」
「そうか。ありがとう」
福嶋は二人にお礼を言った。
その数分後に鐘がなり俺達は待ち合わせ場所に向かった。

ＤＡＹ２　増加大（ゲーム終了後）（前書き）

遊佐＜＜＜宮崎達と同じクラスで帰宅部。

成宮＜＜＜宮崎達と同じクラスでバスケ部。

南部＜＜＜宮崎達と同じクラスで書道部。

ＤＡＹ２　増加大（ゲーム終了後）

待ち合わせの木工室に着いて中に入ってみると待ち合わせしていた人がいた。
「良く生きていたな
遊佐、成宮、南部」
俺は少し邪魔者扱いした。
「あんた達もね」
遊佐が答えた。
「まぁまぁお前たち落ち着け消灯時間までに話をつけないと」
福嶋は間に入って止めた。
「早速だが本題だ。
君たちはなぜ俺らのグループに入りたい」
福嶋は真剣な眼差しを向けた。
福嶋だけじゃない周りの机に腰掛けて皆も一様に真剣な眼差しを向けた。　「な、何よ皆で私たちを睨んで」
「なぜって、わかんないのか？このグループの規律を乱すかもしれない者を自分のグループに入れたいと思うか？」
福嶋は皆の意見を代弁するかのように言った。
「な、何よ私達があんた達のグループに入っちゃダメだっての！？」
相手のグループの遊佐が言った。
「別にそんな事は言ってない。ただ皆はお前たちがなぜ俺らのグループに入りたいか聞きたいだけ」
「そ、そうなの？」
遊佐が聞いた。
「そうだよな。なぁ？皆」福嶋の言葉に俺らはうなずいた。
「話を戻そう。
なぜ俺らのグループに入りたい？」
福嶋は再び聞いた。

時刻が消灯時間に刻一刻と近づいているなか三人は黙りを決め手話さなかった。

ーーーーーー

消灯時間まで後１０分になってやっと三人は口を開いた。

「なんであんた達のグループに入りたい理由を言えば良いのよね？」

「あぁ」

「理由わ」

皆は固唾を飲んで見ていた。

「理由は、あんた達と居たかったからよ！」

遊佐は言った。その後遊佐の顔は少し赤くなっていた。

「明日死んだら嫌だから今言っとくわ」

「なんだよ？」

遊佐は手を握り顔を下に向けた。

「なんなんだよ？言わないなら寝袋に入るぞ？」

福嶋は言った。

「ちょっと待って。言うわ言うわよ」

遊佐は顔を上げ。

「私は福嶋のことが好き！」遊佐は言った。それは紛れもない告白だった。

「な、なんだよいきなり」福嶋は少し戸惑っていた　「答えわ？」

俺は言った。

「えーっと、まだ答えは言わない二人とも生きて無事ゲームを終了したら改めて言わせてもらう

それまで待ってくれ…」

福嶋は言った。

「そ、そうわかったわ

お互いに生き延びましょ」「頑張ろう

そしてようこそ俺らのグループへ」

福嶋は遊佐と握手を交わしグループへ迎え入れた他の皆も反対する

奴は居なかった。
そして夜は更けていった。

ＤＡＹ２　増加大（ゲーム終了後）（後書き）

＞夜

消灯時間になった時にチャイムがなった。
放送の合図だ。

「えぇ、聞こえてますでしょうか？聞こえていることを前提で話します。

現在の生存者は
４２５人中１５０人となっております。
生き延びているかたは御武運をなくなったかたには黙祷を。
では放送を終わります」

放送が終わった後にチャイムがなり再び沈黙が支配した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8935w/

命のゲーム

2011年10月25日19時06分発行